# 某博士の家事經濟

在大學　龍東逸人

この模範的家事經濟家は、獨逸經濟學博士及び日本林學博士の二學位を有せる人にして、その家政の巧みにして且つ面白きこそ實に感ずるの外なし。されど博士はその家庭のことを他人に知らすを欲せざるを以て、今茲に公然姓名を記するを得ざるも、日常家事に應用せる經濟法を有りの儘說くこと、したれば、讀者その心して讀まれよ。

博士は九人の家族及び召使二人の暮しなるが、家事經濟法を餘程上手に應用され、今は殆んと貯金の利子のみにて生活することを得るに至り居れり博士が月俸八十圓の金にて初めて大學の助教授となられしは今より殆んど十五年前にして、當時の生計の困難なること今も尙ほ眼前に見ゆるが如しと博士は大笑せられき。その一例を擧ぐれば、ある日醬油の無くなりし爲め、野菜を煮る能はずと夫人より告げしことありしに、博士は然らばその代り鹽を使用せよと命じ、鹽煮の菜にて食事を濟せることありし程なりと、されど是は醬油の代金なくして買はざりしにあらずしてその日の豫算許さざりしが爲めなりと云ふ。それ故如何にと云ふに、博士は月給を受取りし時、その内二割五分を差引きてこれを貯金とし、殘金を以て一ヶ月の豫算表を作り、一日何程と定める豫定額以外には如何なる事あるも使用せざるなり。故に例へば一日の食費一圓と豫定しあれば、朝と晝との二度に九十錢使ひ果し、夕には十錢よりなきも決して金を足すことなく、鹽と味噌にても今日はこれだけのご馳走なりと、一家快く食すること、せり。若しこの時に次日の豫算額より二十錢にても支出するとせは、次日には二十錢の不足となるゆへ、又その次の日の豫定額を消費し、遂には一ヶ月の豫算をして有名無實とはし了るべし、斯の如きは豫算上のみならず、規律を亂すの恐れあれば注意すべき事なりと云へるに基けり。

月給は毎年同一なるものにあらず、時々昇給するものゆへ、増給すればする程生活の程度を高くすることを得べし、八十圓の月給の時より百圓の時はそれだけ生活費を高める順序なれば、追年豐になりゆくなり。又種々の原稿料の收入もあれば困難となることなし。博士の理想は、毎月收入の二割五分を貯金し、十數年或は二十年の後に於ては、その貯金を資金となし、資金の利子のみにて生活し、公務を退きて閑散の身となるも、利子のみを以て生活せんとするにあり。これを十五ヶ年間實行せる今日に於ては、殆んど資金の利子のみにて生計を立つることを得るに至りたれば余が年來の理想も近く實現するを得可しと語られき。されば博士は今日にては、原稿料及び月給の大半は悉く資金の内に繰り込みつゝありて、大學教授の中にては安全なる有福者の一人なりと云ふ。

斯の如き主義なれば、その着類の如きも極く粗末にして、殆んと貧書生かと思はるゝばかりなり子供の着類とても同樣にて、近隣の農家（博士は東京市外にあり）の子供と差別なし。故に内情を知らぬ人は貧乏學者と思はざる者なし。現に博士の親類のある人ば博士に對して、何故今少し着類を飾り給はざるか、殆んど小學校教師その儘ならずや、これを購ふ金なくは貸與せんなど、謂ひし程なるよしにて、一見腰辨先生よろしくと云へる風なり、博士はこれに就いて辨じて曰く、吾輩を他人は貧乏人なりと云へど決して貧乏にあらず、未だ他人に一厘の借金せしことなく、又生活費に困窮するが如きことなし。着類を飾らざるは吾輩の位地に相當なりと思へはなり、されど今は勅任官なれば、陛下の御前に出づる時などは勅任の禮服も着し、他人の前に出づる時は、それ相當にするゆへ少しの差支あるまじと。

博士が斯くの如き家事經濟家となられしは、蓋し獨逸留學中に經濟學を學べる時、「經濟學者は先づ一家の經濟を整理せざる可らず、而してその收入の四分の一を蓄へざる者は經濟學者にあらず」と云へる、アレンタム博士の言を聞きしにもよれど左の一話に感動せられたるが近因なる樣なり、其話とは

とかつて博士が留學中、下宿屋にエミと云へる美しき下女ありしが、この美女は下卑にも似合はず三千圓の大金を所有し居れり。その大金を如何して得しやと尋ねしに、幼き時より勞働して得し金を蓄へしものなりと答へしよし。博士はこの美談に大に感じ、これより貯蓄の必要なることを悟れりと云ふ。而してある時博士は戯れに、御身は吾輩の妻にならずやと言ひしに、美人答へて、貴下は上流社會に立つべき尊き人なれは、妾の如き教育なき卑しき身にては提灯につり鐘なり。妾は佐官職（壁ぬり職人）の人を夫にせんと望めり、而してその人は眞面目なる人にして且つ一萬マルクの所持金ある人ならざる可らずと云へり。

博士はこの言を聞て益々感じ、以來この下女を尊敬し決して戯れ言など云ひしことなかりしと。

以來博士はこの主義を實行し、其部下として大林區署小林區署等に任用する役人乃至は召使に至る迄も悉く此主義を實行せしめ居ると云ふ。現に博士の召使なる下卑にて三百圓の貯金を爲す人、人足にて千圓以上に達せる人ありとは誠に美談と云ふべし。而して林區署に任用する役人の俸給を定むる方法は甚た面白き仕方なり。まづ三十圓の價値ありと認むる人には、二十五圓の俸給を與へ月末に至りて五圓を渡し、これを貯金せよと命じ以來毎月貯金なさしむるゆへ、博士に緣由ある人は皆相當の貯金ありて、決して一時の困難に會ひて窮することなしと。

尚ほ博士は、この貯蓄心に富める人を多くし以て健全なる分子によりて初めて富强なる國家を得んことに論及されたり。この一家の經濟より一國の財政に及べる財政論は、政治上より見て大に益する所あるも、婦人には或は解し難き方もあらんかと思ひ、茲に閣筆することゝなしぬ。

## 貯金のすゝめ

一　我父上の賜ひたる密柑の苗木生ひたち
黄金の色の麗しき實さへ結びぬ五ツ六ツ

二　我母上の賜ひたる雞の鷄生ひ立ちて父上よ是も貯金に加えなん
白銀なせる美しき卵生みたり七ツ八ツ

三　我師の君の御教に從ひつゝも貯金せむ
我父母の賜物の貯金に加へなん
身の高のやませば
爲めのみか家の爲やがてもないらむ國の爲